

迷える「玉座」

たむらかつみ
田村 克己

民博 民族社会研究部

王朝時代の玉座

今、ビルマ（現国名ミャンマー）は、急激な動きと変化のなかにある。その大きな契機のひとつとなつたのは、昨年の米国のクリントン国務長官の訪問である。ところで、彼女のような賓客とミャンマーの大統領とが会談している後ろには、かつての王朝時代の「玉座」が控えていたことに気づかれただろ

うか。玉座は「獅子の玉座」とよばれ、王と王権を象徴している。玉座はかつてマンダレーの王宮にあって、四方の倍数の八基（実際には九基）あつたという。一九世纪半ばに英國の支配下になると、王宮の宝物の幾つかが英國等にもち去られるが、この玉座も一基が當時英領インドのカルカッタの博物館に移された。しかし、これが結果的に幸いすることとなる。その後、第二次世界大戦の戦火のなかで玉座は王宮とともに焼失するが、もち出されて了一基が残り、一九五四年に返還された。今ヤンゴンの国立博物館にて展示されており、上述の会談の後ろのものは、二〇〇六年に新しく首都となつたネーピードーにあるレプリカである。



王朝時代の「獅子の玉座」。王と王権を象徴する

新首都・ネーピードー

ネーピードーは一般に「都・王都」を意味する語で、先のマンダレーは「ヤダナボウン・ネーピードー」、すなわち「宝石のような都」という優雅な呼び方がつけられていた。そして、現在のネーピードーが広大な土地を切り開きつくられているのと同じく、マンダレーも、エーヤワディー川中流の左岸に、碁盤目状の街づくりをした計画都市であつた。この点で、現在の政権は、

植民地化の危機にあって外国勢力と対峙した時代をなぞらえているともいえよう。それは、王朝時代の榮光の回復、伝統的な王権の再生を目指すものである。ヤンゴン（ラングーン）が植民地化の過程で築かれてきたことを考えると、

新しい都は、英領時代から続いてきた西欧にならう近代化の流れを断ちきり、克服することを意味しているのかもしれない。

ところで、「玉座」を新首都にもつて行こうとしたときに、守護靈がいるのでヤンゴンから離すと良くないと占い師が言つたことである。そのため、本物は元の場にとどまることになつたという。このような話が人びとにまことしやかに語られているところに、岐路に立つこの國の今のありようがうかがえる。